



選手たちもサポートするマネージャー。彼女たちの支えあっての勝利だ

練習科目、形した4年生も交えて久しぶりに集った前回は祝賀会もあって、撮影のため雪上の練習を披露

今回の取材では撮影のため、ふだんは看不ない雪上の練習を披露してもらった。工藤監督によると、この冬はすでに引退した部員全員が帰郷したのは久しぶりのこと。この風を覚えてきた4年生も、それを引き継ぐ後輩たちも水戸の気風の中秋月を浴びながらボールを扱う明るい表情が印象的だった。

工藤監督は「ラグビーは生きて行く中で大切なさまざまな事を教えてくれる。信頼のある選手にボールは回ってくるし、果敢にタックルできる選手は信頼される。何より人間性があるスポーツだ」と今話している。これは学生のうちや卒業してすぐに分らないかもしれないが、あんな上ツとしたときに今の経験をもとに何かを考へてくれれば、それだけでラグビーをやったまた意義があったのではないかと考え続けていく。

つことかできたこと振り返るチームの記憶は、けじめがある。やる時はちゃんとやって、ブライベートになつたらと下関駅近く竹真くやっっているという。

太田監督が2年生のときは4年3年が各1人、今の4年生がいみんな経験を経て引退してきて、1年生と3年生が部を引継ぎてきたという自負がある。今回のリーグ1部での優勝達成は、ラグビーに限らず、これからの人生の糧となることだ。

最初は手探り状態の1部優勝だったが、選手たちには「こうやって勝つんだ」という意識が浸透していた。工藤監督、山本ヘッドコーチの下、それを支えて進行することができ、選手たちの自信にもつながったように。



太田監督

太田監督は「4年生は、山本ヘッドコーチが就任したのが大きい」とリーグ優勝の要因を語る。北海道プロフット代表との試合については「優勝できた選手から話を聞いたら、彼等にも祝られて嬉しい戦いだったけど、最後まであきらめなかった。走り勝ちだ。」

東北地区の大学でトップリーグがヘッドコーチに就任するのは初めてのこと。その豊富な経験から導き出されるゲームプランが、八戸学院大を1部優勝へと押し上げた。選手たちには、山本ヘッドコーチが立てた戦略を実行に移す下地を、すでに持っていた。これまで続けてきた十分なフィジカルトレーニングが、その下地となったのだ。選手の人気があつてきて、工藤監督が代表選での強化を考へていた矢先での白下ヘッドコーチ就任。まさに絶好のタイミングだった。

合としては1年生が入部する4月から夏までの練習を多くする。夏場に近づくとつれて、より実践に近い練習の練習へ移行していく。工藤監督がまず取り込んだのは、一人ひとりの身体的能力を向上させること。大学リーグ3部、この時代は「ギリギリ」の人数でチームを編成していた。そして現在の4年生、3年生が力をつけてきて、編んだ厚み、大きな戦力が訪れた。2015年4月、トップリーグ1部の山下祐史氏がヘッドコーチに就任したのだ。